

木曾三川を語るフォーラムにおける市民活動について

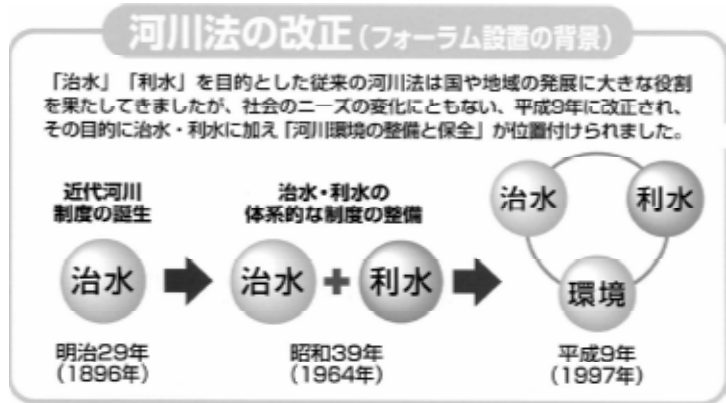
中部地方整備局 木曾川上流河川事務所

調査課 地域連携係長 前田 幸則

1、はじめに

平成9年の河川法改正に伴い、その目的として治水、利水に加え河川環境の整備と保全が位置づけられるとともに、地域の意見を反映した河川整備の計画制度が導入され、以前にも増して地域住民と河川管理者が一体となって川づくりに取り組むことが重視されるようになった。

このような背景のもと、木曾川上流河川事務所では、木曾三川の川づくりや流域環境について、地域住民と継続的に情報や意見の交換を行い、地域住民と行政がお互いの信頼関係を深めながら、協働による川づくりを進めることを目的とし、平成11年8月に42団体、60個人の参加を得て、「木曾三川を語るフォーラム」を発足させた。



2、フォーラム設置にあたって

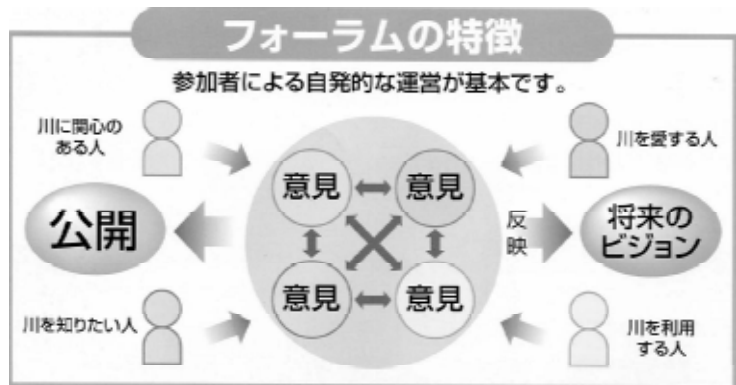
発足にあたって、「木曾三川を語るフォーラム」を川づくりについての緩やかな合意形成の場として位置付け、フォーラムを自由な語らいの場とするため、その運営に参加者が積極的に参加することを原則とした。

話し合いを進めるにあたっては、参加者相互の協力関係を築き、信頼関係を深めるため、以下の4つの原則を設けた。
(フォーラム活動における4原則)

- ・参加者全員が平等の立場にあり、参加者の話し合いによって運営し活動する。
- ・参加者はそれぞれの発言を尊重し、お互いの立場を理解し話し合う。
- ・参加者の話し合いの情報は公開し、共有財産として活かしていく。
- ・河川管理者は参加者に対して、河川に関する情報、行政のしくみなどの情報提供を行う。

3、フォーラム参加者による活動内容

フォーラムでの具体的な活動は、全体会議、勉強会、自主活動、情報発信の4点があげられる。



3. 1、全体会議

このフォーラムの本会議であり、平成11年8月に始まり、これまでに8回開催されている。初期は「よい川」を目指したフリートーキングから始まったが、現在は、フォーラムメンバーの活動報告、他流域の活動グループの先進事例の紹介などが行われ、参加者の交流の場になっている。



↑ 全体会議風景

3. 2、勉強会

勉強会は、参加者に河川行政について理解を深めていただくため、平成12年1月に河川法の勉強会から始まり、ダム工事現場、河道掘削現場などの現地勉強会も含め、これまでに8回実施されている。

勉強会の実施により、行政の持つ情報の参加者との共有が進められている。



↑ 現地勉強会風景

3. 3、自主活動

全体会議、勉強会を通して、参加者の河川への認識が深まり、参加者それぞれが、理想の川を考え、具体的な課題に取り組む活動（自主活動）が起きてきた。自主活動は市民自らがよりよい川を目指し、活動を始めるきっかけとなっており、これまでに、木曽川自主活動、長良川自主活動、魚の環境自主活動、ラジコン利用自主活動の4つの自主活動が活動を行っている。

〈木曽川自主活動〉

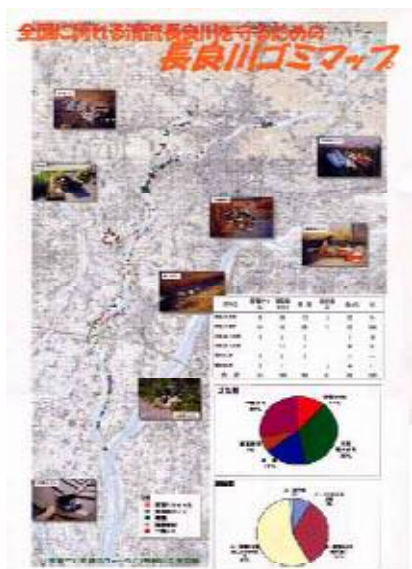
木曽川自主活動では、木曽川の中でも特に多様な河川環境を持つ三派川地区において、川の利用についての情報提供やマナーづくりを地元利用者自らが調査し、河川利用マップ「木曽川ぶらりまっぷ」としてまとめることで、その川への思いを反映させた。マップは、地元の小中学校の総合学習にも活用されている。



↑ 「木曽川ぶらりまっぷ」

また、木曽川ぶらりまっぷを作るなかで、地域の貴重なビオトープであるトンボ池の環境が、近年悪化していることを知り、環境保全について、市民としての取り組み

が議論された。これが、市民グループ「トンボ池を守る会」の発足の契機となり、地元自治会も保全の取り組みを開始している。



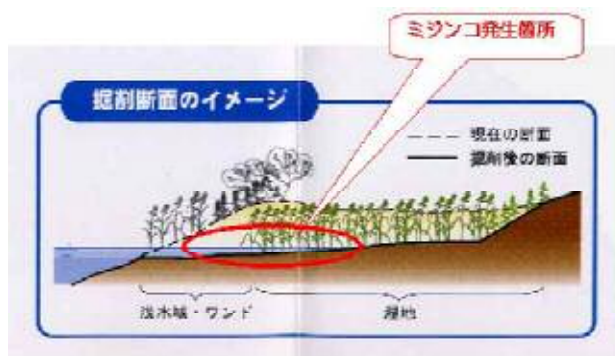
〈長良川自主活動〉

長良川自主活動では、身近なゴミ問題に対する流域住民への啓発活動として、メンバーが長良川流域に投棄されたゴミを調査し、投棄場所やその種類別、原因別にまとめた「長良川ごみマップ」を作成、公表し、家庭粗大ごみ、家電製品の不法投棄問題を訴えた。

←「長良川ゴミマップ」

〈魚の環境自主活動〉

魚の環境自主活動では、当事務所が施工している揖斐川河道掘削について、「揖斐川の河道掘削に関する魚の産卵床の提案」を行った。その提案は、掘削面を緩やかな勾配とし、水際部に浅瀬を設けることにより、水中や湿地を好む植物を育成し、魚類の生息に適した環境再生に配慮した河道掘削の方法である。



↑掘削断面イメージ図

提案を受けながら工事が進められ、自主活動でモニタリング調査を行った結果、水際浅瀬にミジンコなどのプランクトンの大量発生と稚魚が確認され、施工箇所が稚魚の餌場となる環境にあることが確認された。

〈ラジコン利用自主活動〉

ラジコン利用自主活動では、河川敷で安全にラジコン飛行を楽しむため、木曾三川流域の全ラジコングループの17グループが参加し、河川敷の使用時間や、保険への加入などの自主的な共通ルール「ラジコン飛行における使用十ヶ条」を作成し、公表した。

→「ラジコン飛行における使用十ヶ条」を伝える新聞記事



3. 4、情報発信

情報交換誌（フォーラム情報）を毎月1回発行し、フォーラム活動の紹介、参加者の地域での活動の紹介を通して、参加者間の意見交換が行われている。

4、今後の課題とまとめ

今後の課題としては、参加者の拡充、参加者の積極的な運営への参加、地域活動のネットワーク化があげられる。これら3点の課題に取り組むことが本フォーラムの更なる前進につながるものと考えられる。

課題への取り組みとしては、発足当時から微増の参加者数については、現在、パンフレットの配布や、ホームページへの掲載で行っている参加者の募集等、募集方法の再考を行いたい。参加者の運営への積極的な参加については、現在NPO組織により手伝いはされているが、事務局は代行として当事務所が行っており、参加者自らの運営には至っていない。活動原則の一つである参加者主体のフォーラムとするためにも、参加者の運営への参加は必要であり、事務局へのより積極的な市民参加を促していきたい。地域活動のネットワーク化については、木曾三川を語るフォーラムを通して地域活動のネットワーク化が進むと、水系を通しての交流へと広がり、大きな地域の連携を作り出すことができ、ひいては流域を通しての川づくりを考える場としてのフォーラムにつながると考えられ、これには、参加者の一層の交流を図っていきたい。

フォーラム設立当初は、行政に対して意見、要望を言うだけの場にとどまっていたが、河川法の勉強から始まった勉強会を通して、行政の持つ情報を参加者と共有する事で、参加者自らが、川に関する具体的な課題を持つようになり、その結果、自主活動が発足した。フォーラム活動の成果については、行政への反映も出始めており、協働による川作りが進みつつある。今後も具体的課題の議論を継続することが、市民と行政のお互いの信頼関係を深め、協働による川づくりへの実現へとつながると考えられる。

また、木曾三川流域は、行政とともに川づくりの一翼を担うべき市民活動が盛んであるとは言えない状況にまだあるため、本フォーラムが同じ理想や同じ問題意識を持つ人達の出会いの場となり、地域活動のネットワーク化や新たな市民グループ誕生の場となる役割を果たすことを期待している。